は、当社妙見宮（神吉八幡神社）から御旅所と考えられる鳥居まで続いている。また、華やかに彩色された母衣花（ほろばな）、衣裳や持物を細かく描き、祭礼行列に参加する当時の人々の姿を、いきいきと描いている。画面中には、行列の名称も付され、当時の祭礼行列のようすを極めてよく理解することができる。当時の風俗や民俗行事を知るための資料としてたいへん重要なものである。

裏書に「庚文政参辰葉月中旬寫　奇泉斎春朏書」とある。春朏については不明である。平成元年（一九八九）の同神社の調査時には、褪色してしまっていたが、成田廣州筆の板絵祭礼図も残っていた。筆法は異なるものの、本図と内容は一致する。

現在の神吉八幡神社の祭礼は、当時と比べ簡略化されているが、この絵巻が確認されたことにより、内容の一部が復活され、賑やかなものとなっている。

34　国安天満神社祭礼図絵巻　一巻

紙本墨書　縦一五・二　長一九三・五

江戸時代後期（一九世紀）　国安天満神社（加古郡稲美町国安）

国安天満神社に伝わる祭礼図絵巻で、総勢七十余名が描かれており、祭礼行列の次第をたいへん詳しく知ることができる。

この絵巻によると、例年九月九日に祭礼神事がある。そして、その行列は、猿田彦に先導された御先太鼓、獅子頭に続き、各村の八台の屋台が続く。それぞれの屋台について水引の色などの特徴も記されている。そこから、杖払に続き、幟、鑓、立傘、弓など、さらに、杖払に続き、警護された別当籠、太刀、長刀、太鼓、頭人、白幣、金幣、猿田彦などが続き、警護され、一六人に担がれた神輿が続いている。

祭礼行列の順番と役目を、実に詳しく描いた絵巻である。

この絵巻が描かれた時期は、東播磨南部地域に残る他の祭礼図絵巻や祭礼図絵馬から考えて、江戸時代後半の一九世紀のものと考える。

35　阿閇（あえ）神社祭礼図絵巻　一巻

紙本墨書　縦二七・〇　長三七六・〇

江戸時代（一九世紀）　阿閇神社（加古郡播磨町本荘）

総勢百十余名が描かれた祭礼図絵巻である。阿閇神社から海岸までの行列を描き、遥か淡路島西浦を望む播磨灘の海岸に向かって進む構図は、臨海部の阿閇神社らしさを感じるものである。

猿田彦を先頭に、幟、そして、四台の蒲団太鼓屋台の中央に神輿がある。続いて、鉾、幣、弓、鳥毛などに先導された神主や社僧らが続く。

絵巻の中の図柄は、神吉八幡神社や国安天満神社の祭礼図絵巻と共通した部分も多く、一九世紀の祭礼図であると考えられる。

36　呉浚明筆商山四皓図・虎渓三笑図　二幅

紙本着色　縦各一一四・〇　横各六六・〇

江戸時代（一八世紀）　十輪寺（高砂市高砂町）

この軸は、近世後期の高砂町で豪商であった岸本家の五代克孝が、安政六年（一八五九）に菩提寺の十輪寺に寄附したものである。

髯をたくわえた人物の表情をはじめ、松葉の描き方を見るだけでも、作者の技量の高さを知ることができる。衣をはじめとする輪郭線は、少々粗いと感じるくらいの筆致で大胆にみごとに描いている。

呉浚明（一七〇〇～一七八一）は、本姓を佐野氏、字を方篤といい、孤峯、穆翁はその号で、越後新潟の出である。京都に出て、山崎闇斎に儒学を学び、さらに江戸に出て狩野良信に絵画を学んでその技法を修得して、新潟に帰り恩人の五十嵐家を継いだとされる。四十年来門外に出ないで思索に耽ったという。その絵画は、伝統的な漢画の狩野風と繊細な大和絵の土佐風を折衷した中間的なものである。文化一〇年（一